なんで僕が乳がんなんだ

三木　俊平

「残念ですが、やはり乳がんでした」

平成二十六年六月中旬の再診日、五十代半ばの精悍な顔つきをした主治医は、眼鏡の奥から僕の顔をじっと見つめて告知した。

この一週間前の初診時、ぎゅっぎゅっと痛いほど胸をつかまれる触診や、乳腺エコー、マンモグラフィーの検査を受けた。主治医は「触った感じや画像の形状から、ほぼ乳がんだと思っています。明日の乳房造影検査、乳腺穿刺細胞診、針生検の結果をまって、診断を確定しましょう」と言った。

初診から、診断が確定するこの再診日までの一週間、乳がん情報をあまり調べないようにしてきた。知るほどに、悪いケースが、すべて自分に当てはまるような暗い気持ちになってしまうからだ。また、この一週間、「ピンポン球大のしっかりしたしこりは、揚げ物の食べ過ぎによる脂肪の固まりに違いない」と懸命に自分を納得させようとしていた。これまで背中に脂の溜まる『粉瘤』を三回手術した経験から、自分の脂体質によりできたしこりと思いたかったからである。

ガンについては、四十年以上にわたり休肝日のない飲酒や、一日五十本の喫煙を続けてきたため、胃、肺、肝臓などがガンに侵されても不思議ではないと思っていた。

乳がんは、女性固有のものと思い込んでおり、その年間死亡者数約一万三千人のうち、一パーセント程度が男性患者であることを、このたび初めて知った。ただ、そうであるにしても、男性患者は日本全国で年間百人前後に過ぎない。都道府県単位では、多くて三～四人レベルである。その男性乳がんに自分がなるなんて、俄かには信じられなかった。

「乳がんてかあ。なんで僕が乳がんなんだ」

男性にとっては珍しい病気で、症例も少なく、発見が遅れがちなため、その予後は芳しくない、との知りたくもない情報が耳に入ってくる。「乳がんで、ほどなくして死ぬのか」と右に左に心が乱れ、初診翌日の検査を待つ病院の廊下で、すっかり落ち込んでいく感情が抑えられない。

二歳半になる初孫が、小さなお尻を振り振り、こけそうになりながらも、力いっぱい走り、駆け寄って来てくれる。九か月の二人目の孫は、僕の膝に一生懸命つかまり、立ち上がろうと挑戦する。「孫たちの満面の笑顔、愛嬌たっぷりの仕草が、もう見られなくなるのか」そう思うと胸が詰まり、涙がじわりと浮かんできた。

頭の中は孫との思い出から一気に飛躍し、葬儀会場の様子が突然思い浮かんでくる。人の死をまだ理解できない初孫が「じいじ、起きて、起きて」と棺の中へしきりに声をかける。二人目の孫は指をしゃぶりながら、その様子をけげんそうにじいっと見つめる。そんな仮想の情景に、むやみやたらと無念さが募る。検査を待つ周囲の人たちが、奇異な視線を僕に向けているにもかかわらず、溢れてくる涙をどうにも止めることができなかった。

六月中旬の再診・確定診断から七月初旬に入院するまでの二週間、一日も早く手術を受けて、けりをつけたいと焦燥感が高まる。さらに、六十代半ばで、高齢の母やそりの合わなかった元上司などよりも早く死ぬという想定外の事態に、心が激しく浮き沈みする。

数年前、同い年の従兄弟が、腎臓がんのため六十歳で亡くなった。息子に先立たれた、寝たきりの老いた父親の哀れさを目の当たりにした。それ以来、「子どもは、親より早く逝ってはならない。それは何よりの親不孝」と思い定めてきた。

母は、手足が不自由で、老健施設で寝たきりに近い状態にある。が、九十四歳の今も、頭は介護職員も唸るほどしっかりしていて、まだまだ元気である。それだけに、母の失意を思うと、先立つ悲しさでいっぱいになる。

マスコミでは最近、「親の家の片付け」がよく取り上げられている。僕は、かねて母の死後に、田舎の実家を処分する心づもりであった。しかし、逆縁になるのであれば、業者との交渉に慣れない妻や、仕事が忙しく田舎に遠出しにくい二人の息子の手間ヒマを、少しでも軽くしておいてやりたい。「早速にも処分に着手しなければ」と焦る。

サラリーマン時代、職場の上司や先輩、同僚すべての人と人間関係が良好であったわけではない。性格や肌合い、仕事の進め方などにより、どうしても人間関係がしっくりいかなかった人たちがいる。こんなときになぜか、そうした人たちの顔が次々に浮かんでくる。自分が、その人たちよりも先に死ぬ。「彼がなあ……。彼もなあ……」と薄笑いされるに違いない口惜しさが、ふつふつと湧いてくる。

妻は「もう、そんなことばっかり言って。どうして、間もなく死ぬと決めつけるの」と呆れ、いらついた。それほど心の揺れ動く、長い二週間であった。

七月初旬、大学附属病院に入院し、二日後には、左の平べったい乳房とリンパ節二か所の切除手術を受けた。

僕は仕事で病院運営に携わった経験があることから、日進月歩と評される医学や医療技術の発達、さらには医師の不断の努力と力量を信頼していた。このため、手術そのものについては「安心してお任せします」という心境であった。

手術の翌日、執刀を担当した四十前後の誠実そうな医師から「具合はいかがですか」と尋ねられた。「気になっていた異物を取り除いてもらって、ずいぶんすっきりしました」と即答した。

しかし、そうは言ったものの、目に見えないガン細胞が体内のどこかに潜んで、ニヤリと笑っている。そして、悪さを始める機会をうかがっている。そんな不気味さや懸念はぬぐいきれなかった。

手術後三日目には、栄養点滴管や導尿管など、つながれていた五種類すべての管から解放された。病院食では食欲がとても満たされない。院内売店へおやつを買いに出かけるほど旺盛で、手術後の体の回復が順調であることを実感していた。

手術した部位の引きつりを予防するため、腕を上下左右にゆっくり動かしながら病棟の廊下を何度も周回する。それでも一日が長く、時間を持て余してしまう。高層階の病室から、人や車がせわしく行き交う神戸の街を眺め、家族に思いを馳せる。

家では、妻がかいがいしく家事をこなしているのだろう。息子たちは仕事に追われ、若い嫁さんたちは幼い孫の世話で忙しくしているに違いない。

妻は結婚以来、僕や子どものことを一番に考え、とりわけ健康について気を配り全力投球をしてきてくれた。大きな病気をしたことがない僕の今回の発病は、妻にとっても思いがけない衝撃的なことであったと思う。口には出さないが、僕の死亡後のことなどにも思いを巡らせた様子がうかがえる。

また、二組の息子夫婦にも寝耳に水のことで大変びっくりしたようだ。発病の知らせを受けた翌日には、六人全員でわが家へ見舞いに駆け付けてくれた。入院時には説明に立会い、手術当日は終日病室で待機するなど、多忙にもかかわらず時間をさいて気遣ってくれた。

幸い僕は手術後の経過も良好である。妻はもとより、息子と新しく家族になった

嫁さんや孫にも支えられている。「こんなにいたわってくれる家族がたくさんいるって、本当に嬉しいなあ」と感慨しきりであった。

七日間の入院を経て、七月中旬、退院となった。

妻が病室に迎えに来るのが待ちきれない。左手に自宅から持込んだマットレスを抱え、右手には大きなスーツケースを引きずり、ナースステーションの前を通る。お世話になった看護師さんから「海外旅行に行くみたい」と冷やかされながら、他の患者さんに配慮した小さな拍手に送られ駐車場へ向かう。

一週間ぶりの自宅で、元気に退院できたことを喜び、妻と快哉の乾杯をした。息子夫婦や孫たちも早々に、退院祝いにやって来てくれた。屈託のないはじける笑顔に会える、このうえない幸せをしみじみと噛み締めていた。

その一方で、まだ、ガン細胞の特徴やリンパ節への転移などを詳しく調べる病理組織検査の結果を待っている状態で、なんとも落ち着かない気分が続いていた。

手術後一か月、八月初旬に病理組織や免疫染色検査の結果が出た。初期のガンであることやリンパ節へ転移がないことは分かった。しかし、再発リスクは中程度であった。高リスクでないことは言うまでもなく、何とか低レベルのものであってほしいと、虫のいいことを考えていただけに、ちょっとがっかりした。

それでも、今後の治療が、ホルモン療法による抗エストロゲン剤の服薬が最適と診断されたことに救われる思いであった。抗がん剤治療になると、倦怠感や食欲不振、脱毛など、多くの副作用に悩むことになるのだろうと案じていた。そこまでは必要ないとの病状に、「やれやれ」と大きく安堵した。

動転した男性乳がんの告知から半年が経とうとしている。

主治医は生存率や余命について、これまで一言も触れない。僕にとって良いことなのか悪いことなのか、もやもやしている。また、毎日、十センチにわたる横一文字の赤い手術痕を目にする。「ひょっとして」と再発、転移の不安が頭をもたげる。散歩の道すがら目にするいつもの風景や家々の様子に、ふっと、「どうなっても、何ということもないか」と思ってしまうこともある。

だが、日常生活に何の支障もない。力仕事や車の運転、重くなった孫の抱っこなども気にならない。心配していた服薬によるほてりや吐き気などの症状も、今のところ余り感じられない。

ふむ。これまでのことやこれからのこと、来し方行く末について、もうあれこれ

思い惑わないことにしよう。
支えてくれる妻や息子夫婦、僕の目尻を下がりっぱなしにさせる孫、そして母。
九人のまま、今の今を自然体で……。